
私の家族は！

創輝 咲弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の家族は！

【Nコード】

N8958W

【作者名】

創輝 咲弥

【あらすじ】

この物語は自分のブログ

「何が何でも幻想入り」からの転送です

少し表現やタイトル

内容の追加などがある可能性があります
よろしくです

ちなみにブログでは「血縁なんて関係ない！」で
やっています

これが原作です

このストーリーはオリジナルです

キャラ紹介（前書き）

この小説は中学1年生が
想像にまかせ、妄想入りの
小説です

読んで感動する系の物ではないと思われませんが
楽しんでいただければ嬉しいです

キャラ紹介

主人公

七咲ななさき
優ゆう

男、13歳、中学1年生

身長、135?

体重、25?

性格、仲良くなると良く喋ってきたりするが
仲良くなるまではしーんてきな人見知り

やるときはやる!

けど、めんどくさがり

明るく、元気、すこし意地悪

髪型、女の子のショートな感じで
きれいな金髪

特技、バスケット、料理、運動系

その他、スタイルがよく男であつても
女装したら、まったくもって
男と解らないほどの可愛さ

バスケット能力は驚くほど上手い

ミニバスではキャプテンだった
しかし、身長の問題上
ポイントガードしかほほしない

ツンデレがたまにあるのがいいような悪いような

主人公の紹介でした！！

お兄ちゃんは行ってくる

運命ってものはちょっとした所にあると思う
それが嬉しいこと、悲しいことなど関係なしに
いつかは、やってくる無情なものだ。

そのものの無いと信じたいやつもいれば、信じるやつもいる。

そんな運命を俺は今、確信した。

突然の事でしばらく追いつかなかった頭がやっと、現実を…理解した。

親の死、そんなものがこのときに起きてしまった…

こんなこと、ドラマやアニメの中だけだと思っていた
でも、この世にあった、いや、あるのはわかっていたんだ
自分にはありえない事と思っていただけなのだ

親は二人でドライブに出かけたらしい

俺達兄弟は学校に行っていた

そのドライブで対向車線のトラックが車線をはみ出して

親が乗っていた車に正面衝突した。

親は即死、トラックは隣の民家に突っ込み運転手は重傷、

何ともいきなりの事だった…

死んだんだと思うと朝、いつものように交わした
挨拶が何とも寂しい最後の会話だったと思うと
これからの事で不安になる

でも、乗り越えていくしかないのだ、まだ、すべてを失ったわけでもなく

希望だってまだまだあるはずだ、それがどんな事でどんな形であっても…

俺は信じていた、いやこのときは信じるしかなかったのだ
目を背けたくなるような嫌なこともすべて

ソファーに腰掛けて親戚のおじさんやおばさんが話している
何を話しているかは俺はもう理解していた
たぶん誰が子を引き取るかだろう。

兄弟は3人で俺は真ん中

兄が居て、妹が居た。

妹は悲しいのか俺の隣でうつむいている

俺は、妹と一緒に妹の部屋に行った

そしてベットに妹を寝かせた

自分もベットに腰掛けて泣くのを我慢していた

妹の頭をそつと撫でて言った

「泣いていいぞ、俺が居てやる」

「うん、グスツ、ありがとうお兄ちゃん…」

そう妹は震えた声で言った、そのあとは思いのまま
泣いていた俺はただ頭を撫で続けた

それから俺はリビングに行った、

妹は疲れたのか寝た

俺は親戚たちがなにか決めたことに気がついた
おばさんが俺に近づいてこう言った

「ねえ、優君、話があるの、嫌かもしれないけれど

最後まで聞いてね」

来た、俺はそう思った、結局3人じゃいれないとかだろう
年齢的に話すべきか迷ったのだろう

そんな事を考えていたときに聞いた言葉が

俺は信じられなかった、信じたくなかった、信じるしか選択肢は無いのに…

「優君はねお母さんの子じゃないの…小さいころに
本当のお母さんは亡くなったのよ」

ありえなかった…あんなにやさしいお母さんが
本当のお母さんじゃ、ない？

自分はまたパニックになりかけたが
なんとか保てた

そのあとに聞いた話によると
自分だけが違うお母さんで

他の2人は本当のお母さんらしい

なんだよ、自分だけ仲間はずれかよ！

そう思っただけ聞いていたら

また驚くことが出てきた…

なんと、これから住むところは

自分の本当の兄弟で他の家に

引き取られた所らしい

しかしその家もいろいろあるらしく

大学生の人がお父さんになっているらしい

俺はここに行くのだという、

別に悲しくなんか無い、だって、俺は新しい家族に会えるのだから

今日はもう寝ることにした

ベットに入った自分は何を考えただろう

何も考えてはいなかったのだろうか

しかし

このあとの事に不安を抱いていたことは
確かだのだった

新しい家族

翌日の朝、学校に行き、先生に事情を説明し
帰りの会で転校する事が開かされた

ちなみに転校するのは来週の土曜日

今日は水曜日、もう少しだけは時間がある

しかし、そんな余裕はなく気がつけば…

土曜日、引越しの日

家の前に

親戚、今までの家族、

送りに来てくれた親友に軽く挨拶し、

車に乗り込んだ

「もう行くんだね…お兄ちゃんの事忘れないからね！」

そっか、お別れか、やはり別れは悲しいよな

「俺だつて忘れないよ…また会おうな」

そういったあと、自分に乗せた車は発車した

別れは寂しい、悲しい、けど、まだこれから

新しい出会い、嬉しいこと、楽しいことが

あると思い、我慢した

新しい家の近くまでやって来た

だいぶ遠くにあり、自分の住んでいた岡山から

滋賀の大津にやって来た、まだ滋賀県の事を良く知らない

知っていたことは、琵琶湖があることぐらい

そんな所にやって来た、不安はあるがそれよりまず、

楽しみ、期待が大きかった

新しい家に着いた、思ったよりも良い感じの一戸建てで
ちょうどサイズのサイズかとも思ったがなんか狭く感じた、
まあそんなに余裕はないのだろう

どんな家族だろう、怖くないといいがたぶん問題ないだろう
とりあえず、インターホンを押した

こんなにドキドキしたのは告られた返事を言う時いらいだった
なぜ返事でそこまでののかはまた機会があれば教えよう

「はーい」

そう、男の人の声と共に足音が近づく

なんにんかの足音が止まりガチャリと扉が開く音がした

「はじめまして！今日からお世話になる七咲 優です！」
とにかく人が顔出すとそう挨拶をして頭を下げた

「はじめましてや、とりあえず中入ってや、荷物は
入れという貰うさかい」

男の人はそういうと中に招き入れた

家に入ると玄関に女の子が3人…

とりあえずをしよう…えっとどうしよう
なんて言おう…

「え、えっと、七咲 優です 呼び方はなんでもいいです、
え、13歳中1です、よろしくお願いします」

うわー、なんかおかしいな…しかたないか…

「よろしく、優さん！」

高校生の人が挨拶をしてリビングに招いた
自分もそれに続いて入ってく女の子の後ろで
きよろきよろして入ってった

「そつだ、名前教えてくれませんか？」
いきなりで悪かったかな？

まあとりあえず聞こうか

「私は福井^{ふくい} 月菜^{るな}高校2年

月菜姉でもなんでもいいですよ」

ほほ、月菜姉か、どうしようか

「えっと、福井 奈々^{なな}夏です、中1つしよ

奈々お姉ちゃんでもいいつしよ」

奈々夏さんが、奈々お姉ちゃんか

「福井 遊南^{ゆな}遊南か遊南ちゃんてよんでね

お兄ちゃん」

そうか、お兄ちゃんか、

可愛いな、仲良くしようみんなと

「俺は福井 麗夜^{れいや}だよしくや」

麗夜お兄ちゃんか…お兄さんの方がいいやすいからそうしよう

そのあと少し話をした

全体的に向こうから聞いてきて自分は返事ぐらいだった

まあこうなるとは思っていたけどお…

そしてご飯を食べるときになった

「もう7時か、お腹すきませんか？」

そう言った

「じゃあ今日はファミレスでもいいかいな」

そう言って兄さんは出かける準備を始めた

それに続いて俺たちも準備をしていた

本当の家族？そう、俺の家族

「おおゝ初めてだなゝファミレスって」

そう、前住んでた所はこんな街じゃなかった為ファミレスなど無かった…

「そうなのですか？じゃあなんでも頼んでくださいお金ならお兄さんに任せとかば問題ないです」

月菜姉さんは優しいな

しかしお金が気になるから高いのは避けよう

「なんでやつ、お金の事をすべて任せるな！月菜もちゃんとしないとお嫁にいけなくなるんやで？」

おおゝ反撃反撃…あまり意味も無いかもしれないが「ねえねえ優つてさゝ何時から学校行くのおゝ？」

おうゝそういうえ言つて無かった…ん？

俺も聞いてないじゃねゝか

「わかんない…あ、食べるの来たよ」

ちよつと自分も知りたいなゝお兄さん知ってるかな？

「ああゝ来週の月からやら、なんで聞いたんや？」

だつて、一貫校だからね、一緒に歩いて行くんだよ気になるじゃんかゝ」

「火曜日やで」

「火曜日から？兄ちゃん？」

兄さんはうんと頷いた

おおゝ一貫校かゝ

この後聞いたが高校まで同じらしいw
なんて学校だ

「お兄ちゃん火曜から一緒かゝ楽しみにしてうゝ」

おおゝ遊南は可愛いなゝそう思いながら
笑顔に向けた

そつした会話をまじえて楽しくご飯を食べて
家に帰った…行き帰りは自転車で
自分は…なぜか月菜姉さんの
後ろに乗った…………なぜ??

あ、二人乗りとかは気にしたら負けなんですよ！

ゝゝ家ゝゝ

「あのゝ所で荷物は何処の部屋に？」
つまりは自分の部屋は？ということだ

なんか嫌な予感がしてたまらないぞ

「あゝえつとやら…奈々夏ちゃんと同じ部屋やら」

「は、え、まじで？」

なんだよゝゝ嫌な予感さんよゝ当たったじゃんかゝ
とりあえずどうゆう事が聞こうじゃんか

「うん、奈々夏ちゃんの部屋は少し大きかったから
2人でもマシだと思つてなっ」

へゝゝあんたはなんかおかしいね、と言いたいところだったがそれ
よりも、

「そうじゃなくて、なんで女子同じ部屋で？
部屋余つて無かったの？」

そうだったらお兄さんのへとゆうのも
ちよつと考えて、

中1だとしても、もう13歳だよ？
さすがに女子とは、しかも中1…血が繋がっていても
だねゝさすがに問題が…」

「なにゝ？優は私とが嫌つしよ？折角準備したのにつしよゝ」

ぐはっ、さすがにきついぞ今は…

もう断れないな…まあいいか、問題あってもしらん、んなもん

「は、は…いわかったよ…一緒にいいです」

もう、先が心配だ…何か楽しい気分でもあるのが不思議だ…

「じゃあお風呂入っておいで…部屋は奈々夏が

なんとかかしくしてくれるから少しで寝れるようになると思うで」

お…それは助かる

「じゃあお言葉に甘えて」

そう言って自分は

お風呂に入った…

「あ…明日は一緒に遊びに行くつしょ？」

相談はあまり大きな声ではしていない
バレルと行けないのだ

「そうだな、何処行こうか、優君はどこが良いやろ？」

「お兄ちゃんはね…え…つとね、わかんないやあ」

えへっと思って誤魔化した遊南

「そうね…とりあえず買物ですか？」

そのあとにゲーセンでも行きますか？」

「そうだな…うん、明日はなんか買っでやるか

お前たちも一緒に買っでやるで」

「ホント…やった」

そして優が上がって来そうだったので

会議は終了し、部屋に戻ってった…

奈々夏だけは残っていた部屋を紹介する

為である…風呂はそのあとのだろうか？

新しい家での生活

しかし、ほんと驚いた…
なぜこうなる

同じ部屋はまだわかるのだが同じベットは無理だ…

さつきから姉さんに言うのだがまともな返事が来ない

「だから同じベットは問題あるって」

「大丈夫しょっ！双子なんだし」

おい！という理由だ！！

もう諦めて床で寝るしかなさそうだな…

「優、ほら寝るっしょ！」

「え？わあっ」

姉さんが急に後ろから抱きついて

そのままベットに入れられた

「奈々姉、何するんだよ、離れろよ」

あまりの事に少し怒ってしまった

「いいっしょ！別に…いい…zzz」

ね、寝やがった！

くそっ！しゃあない寝るか

~~~~朝~~~~

「ん、なんか暑い」

背中の方になんかくつついてる…

「そっか、奈々姉か…」

奈々姉起きろよ」

「ん…優？おはよ…」

そついうともそもそと起きてくれた  
自分もベットから抜け出して

顔を洗いに洗面所に向かった

「おはよう優さん、眠れました？」

「おはよう月菜姉、ちよつと寝にくかったです」  
本当に、誰かのせいだ

「そうですね、まあ分かります、奈々ですよ」

「そう、奈々姉です」

そんな会話をし、着替えて朝ごはん、のハズが

「奈々姉、離して」

「嫌っしょ、さあ優、食べてっしょーあーん」

「何する」

とかなんとかになった

なんだよこの展開

そしてお兄さんが今日は買い物に行こうと言ったので

支度をした…一様街なかに行くようなのでセンスの良い服の取り合わせにした

「へええー、駅に近いんですね」

思った以上に駅に近く良い土地らしい

「ここかりや、京都に行くんだよ」

そっか京都が良いな、京都か

京都行くのは修学旅行以来かな？

「わっ、何この多さ」

ホームにあるダイヤ表を見て驚いた

快速とかもいっぱいあるし

新快速まである…さすが都会だな

いや、これが普通なのかな？

そんな事を考えていると電車がやって来た

「優！人が多いから立つけど大丈夫しょっ？」

奈々姉はそう言っただけ開いたドアの横に並んだ

そのあとただ単に奈々姉について言ったら扉から離れた通路で立っていた

「優？手すりもつといた方が良いよ」

と言われ座席の横に付いている手すりをつかんだ

「奈々姉、兄さんたちと離れたけどいいん？」

いや、人があまりにも多いためか別々の場所に居た

「大丈夫っしょ、それにドア付近は大変だよ？上の輪しか触れないから、私達届かないでしょ？」

俺はそっかと納得してそのまま京都まで行った…

## 楽しい買い物！？

今は京都、でかいショッピングモールで買い物をしようということになりました

しかし京都はホントに人が多い、休日といっても多すぎる…

そんな事を考えながらふと思う

あんまり人の多いところ好きじゃないんだよなあ

だって、疲れるから

「何買う？欲しいものは？？」

そんなことを考えていると

月菜姉が顔を覗きこんで言ってきた

ちよつと顔が近いですよ月菜姉

「えつと、服とか靴とか…その位です」

考え事をしていたがすぐに返事した、いや一瞬で考えてたことは吹っ飛んだ

あまり欲張らずファッション系で少し買ってもらおう  
だって…

「優くもつと無いっしょ？服なら一緒に選ぶのにいっしょ？」

「うん、無いね。奈々姉一緒に選んでくれるの？」

欲張りは厳禁だし奈々姉が居れば安心だ、いろんな意味でもね

「じゃあそうしてもらおうか、奈々ちゃん頼んだで」

兄さんがそういうと奈々姉は自信満々と

「大丈夫！任せてっしょ！」

と言って俺の手を引っ張って行った

こんな可愛い姉が手を引っ張っているところを他の人からどう思うのかな？

歳とか身長とか似てるし…？付き合ってるように、ないない、自分で否定して

奈々姉の隣に並ぶ - なんだか知らないけど通るとこ、みんなが俺たちを見ている

金髪のせいだろうか？二人ともだからか？

自分の中で疑問を作っていたら若者向けの靴を売っている店に奈々姉が入って行った

自分も後に続いて入った

中には運動靴からスニーカー、いろいろ売ってある

ちなみに自分の足のサイズは23,0？

とても小さい、探すのは大変なのだ

良い靴でもサイズがあるかどうかなのだ

少し大きいサイズなら丁度、よく残っている、とても小さいもんね

そんな事を考えながら良い靴を探す…

そつえば、兄さんたちは何買うんだろう？

そしてこの店では新しいスニーカーを買った

オレンジがベースで少し白が入っている

以外と好きな色合いなのだ、靴ひもはもちろんオレンジ

そして、次は服を見た

店の人には女の子の服を進められたが男なので断った

まあ奈々姉もすぐく推している服があったので

一つだけ女の子の服を買った

しかし、すごく似合っていたので周りの客も少しみとれているほどだった

そのあとは、雑貨屋に寄った

奈々姉がいろいろと買っていた

ちなみにここには10分ぐらいいたが

周囲からはいろんな視線が送られていた

その視線を気にしつつ会計を済ませたら

少し喉が渴いたと奈々姉が言った

俺も顔いて一緒に

フードコートに行くことになった

そつえば奈々姉周りからの視線気にしてないなあ  
やっぱり慣れてるのかな？

## 何を買ったんだろう

フードコートに着いたらおいしそうな匂いが漂っていた、その匂いを嗅いでいると

すぐにお腹がすいてきた、

こういうときは

一緒になんか食べよう

そう考え奈々姉に

ある提案をした

「奈々姉、フードコートでアイス食べようよ」

「そう？まあいいつしょ、開いてる席あるつしょ？」

よしきた！こうなったら良い席確保しよう

フードコート内を一周見まわし窓辺の席を発見した

「窓辺の二人席開いてるからそこで良いよね？」

「おお、いいつしょ！近くに中学生の男子グループ居るけどたぶん大丈夫つしょ」

そういうと俺はアイスを奈々姉に任せて

席を確保しにいった

なんか座っていたら周囲からの視線が痛い

今日の服は男もののハズだがなんか

可愛いなあ……おかしいおかしい！！

「お待たせ、とりあえず同じのにしといたつしょ」

奈々姉はストロベリーのソフトクリームとコーラを2つ買ってきた

「ありがと、ねえ？俺って男としてカッコいい？」

ふと、気になったので聞いてみた

なんか一つ嫌な返答がパツと思い浮かんだがとりあえず聞いてみた

「いきなりなになに……まあそうだね、優は……カッコいいより可愛い！っしょ」

「やっぱりか……まあ可愛いでもいいか」

ちなみに優は身長がすごく小さいし顔が可愛く

髪型は女の子のショートにそっくりのせいで

パツと見いは女の子なグライである……ん、男の子と思われることなんてないか

嫌でもないけど

二人でソフトクリームを食べていると

男子グループの2人が声をかけてきた

「なあ、2人さん、双子？可愛いね^^

一緒に買い物とかしない？」

なんだと、あの奈々姉の顔が真つ赤だ、何かあるのだろうか？

ついでに2人とも身長は同じぐらいで低く

双子である……俺、女だと思われてる？ま、あたりまえか

「あの、ちょっと困るのですが……」

そう言つて様子を見ている

「ええ……なんでさ……女の子二人だと危ないよ……？」

「だから……俺、男ですよ、ついでに家族と来ているので困ります」

どうだ？諦めるか？てか、諦めてください

「まじで！お前男？ありえねえ……」

何処の学校？」

「え、ちょ、

「あんたいい加減にしないっしょ？

あと私あんたと同じ草津一貫校の

中学生です、たぶん同級生だとお」

わ……さすがだ、奈々姉は心強いね！

男子グループの二人は言ったんグループに戻るなり

何かを喋ってからやって来た

「なあなあ、折角だから写メとらして？」

うっっん、どうしようかな

奈々姉にアイコンタクトを飛ばすと

仕方ないわね、と返事が来た

「えっと、いいですけど」

「撮るなら一緒に写るっしょ！」

奈々姉はそう言っただけで男子の前に

立った、身長的に丁度よかったのだ

そして写真を撮り

別れた

「いきなりでびっくりした」

「そうっしょ、まあ、良くあることだから…本屋にも行くっかし  
ら」

「うん、本屋で何買おうかな」

そうして買い物をして

兄さんとも合流して家に帰った

妙に兄さん達の買い物袋の量が  
多く思えた

何を買ったんだろう？

「兄さんもうやめてください！

俺が可愛いからって別行動を良いことに

女ものの服買わないでください！

しかも似合ってるし、サイズも良いのを…」

何があつたかと言うと

兄さんが女ものの服を買ってきて俺にくれたのだ  
え？女装させる気？いや女装にならないか…

「お似合いなんだしいいじゃん

あと俺は禁止で『私』にするんやで」

「え～～～ないよそれわ～～～～！！！！」

絶対に嫌だな

「優ちゃん可愛い～～っしょ」

「ううううううううう」

くそおおおおおお

奈々姉の仕留めでも言い返せなかった

ついでに「優ちゃんのだよ」とか言われて  
渡されたのは私服、それも女ものの

服だけだった

一つだけ買ったけど兄さんがそのまま部屋に持って行った物のうち、女もんがあった気がした、しかも派手ななんだろう？ サイズ的には小さかったが？

そしてこの日はベットに入った

あとで奈々姉が中に入って来たのぐらいまで覚えてる

今日から新しい学校！可愛い転校生！？

「んっ…」

もう朝かな？

「優っ！朝だよ起きてっしょ！

今日から学校行くんっしょ」

そっか今日からか、

月曜日、さてどんな学校かな？

「うん、おはよ」

ねえ？学校の制服どこだっけ？」

昨日どこに置いたか忘れてしまった

「机の横にあるっしょ、でも何でっしょ？」

「いやっ、制服が気になってね」

「そっかっ、そうそう着替えて

降りてくるっしょ、もうご飯できてるっしょ」

「うん、わかった」

そうして着替えてみたものの

サイズは少し大きめでちょうどいい感じである

まあそれはいいが…この服センス良いな

そんな事を考えているとあるものが目に入った

「あれ？昨日こんな髪止めあったっけ？」

ふと視線を落としたら胸当たりの

ポケットに髪止めが2つあった

しかもピンクと水色で可愛かった

「おはよう」

一階に下りるともうみんなそろって食べていた  
家族みんな制服を着ている

ちなみに制服は小中などの分け方で違う

「優お姉ちゃんおしよいよお〜早く食べよお〜」

「ごめんごめん、いただきます〜す」

顔の前で手を合わせてごめんの後に  
そのままいただきますと言った

今日のご飯は味噌汁にサラダつきの

ご飯！うん、豪華だね

そう考えつつ味噌汁を食べる

「優？どう、おいしい？」

「うんととてもおいしいよ」

お世辞無しで言えるのは嬉しい

特にこの味噌汁は卵が入っている

これがすごくうまいのだ

「そっか優お姉ちゃんが喜んでよかったあ」

「おお〜こっちも嬉しいぞ〜…ん？」

今、遊南、お姉ちゃんって言った？」

「え？当たり前じゃん、お姉ちゃんなんだからあ」

「おい、待ってよ！女じゃないよ俺？」

何のいじめだよ

ん、そっぴやあなんかあった気がしてならない、

なんだこの感覚…何か忘れてるんじゃない

「優ちゃん俺っていつたらだめって言ったやろ？」

1回言う度に女もんのなんか付けさせるし」

「兄さん何言ってるの？てか、手にシュシュついてる！

何時の間に…！」

誰がやったかもわからぬ早業で手にシュシュがついていた

「優ちゃんわかりましたか？もう言ったら駄目ですよ？」

「月菜姉まで〜ぶ〜わかったよ〜私っていつから…」

「優お姉ちゃんえらいねえ〜学校でも頑張ってるねえええ…」

「……え、学校もそうなの！う〜」

すぐく間を入れてから声が出てきた

自分でも声が出せたただけすごいと思うほどの驚きだった

「がんばれ優〜」

「奈々姉〜……仕方ないね」

そして学校には兄さんに送ってもらった

奈々姉達は先に歩いて行ったので

2人の時に兄さんと喋ってたら

髪に髪止めの水色の方を止めてくれた  
止めるとますます女の子みたいだった

…別に悪くない…

〜学校〜

「今日転校生が来るんだって〜

どこのクラスだろ〜」

これはクラスで元気のある男子の一人である

「男子？女子？どっち？」

「制服からしたら男だったと目撃者は言ってたよ！  
でもかなり可愛いらしいぜ！」

「〜「おお〜〜」〜」

すぐく騒がしく興奮している人たちと  
ちよつとわくわくしている人が

しかし奈々夏は誰のことかわかっていたので  
その騒ぎを外からみて楽しんでいたのだった  
しかも馬鹿男子は本当に馬鹿だと確信していたので  
それも面白く拝見していた

その頃、優はと言えば

「失礼します」

職員室に居た、その理由：いや、当たり前なのだが、

「今日からお前が入る7年3組の担任の田中だ、よろしくな」

「こちらこそよろしくおねがいます、田中先生」

すっかり挨拶をして、学校の事を軽く教えてもらった

先生によると校舎はすごく大きく設備もよくきれいだが

大きすぎて迷子にならないように…」と、注意された

別に方向音痴や天然ではないと（自分では）思っているので

その心配はないとして考えることにした

先生に誘導されて、7年3組の教室までついて行くことになった

まあ、ホームルームで挨拶をして合流するためなのだが…

この廊下を歩いて行くというのがすごく緊張して

心臓がバクバクしているのがわかった

そしてついに7年3組の教室の前に来た

先生にはここで待つとくようにと指示を受けたので

そうつすることになった

ちなみにここは2階で景色もいい、まあそんなことはどうでもいいのだが

そんな事を考えていると中から『入っていいぞー』と、

声がしたので教室に入った

～～～教室～～～

「おい席に着けーホームルーム始めるぞー」

先生が入って来たので騒ぎはしずまりみんな笑顔で先生の言葉を待っていた

「今日は転校生が居るので紹介します」

そういうとみんながみんなを見まわして喜び合っていた

なんせクラスが5クラスもあるからどこに来るかで

わくわくドキドキしていたからだ

「入っていいぞ」

「失礼します」

そう言つて教室に入つて教卓の方に行つた

「「「おお」」」

なぜか歓声がわきあがつた

「自己紹介をしてもらおう、どうぞ」

「えっと、私は、福井 優 5月24日生まれで

好きな教科は体育と家庭です

よろしくおねがいします」

これでたぶんオツケーだと思つ

しかし、いや、大丈夫だ…自分でそんなやり取りをしていた

「じゃあ質問のあるやつは居るか？」

そう先生が問うといっぱい手が拳がつた

何を聞かれるのかが心配で仕方がない

「えっとじゃあ海音」

先生はそういうとある男子を指名した

「優さんは男子？女子？」

「えっと、男子ですが？女子に見えました？」

そう言つと

「とつても見えましたが！」

そう返事が返つて来たので

クラスは笑つていて自分は顔を赤く染めていた

「じゃあ優さんは奈々夏さんとはどうゆう関係で？」

「え？、双子で自分が弟なだけですか？」

「じゃあ私と言うのはなぜですか？」

ちよつと一瞬迷つたがやはりこれは

「それは秘密です」

が妥当だろうね

言うつもりは今のところない

「えつともういいか？じゃあ次は耀大」

「優さんは前の学校では何の部活をしていましたか？」

うん、安心して答えられる質問だw

「えっと、バスケットボール部です…」

もちろん男子ですよ」

勘違いされたくないの、付け加えをした

「そうですか、ありがとうございます」

そうして質問は終わった

「じゃあ優はちょうど開いてるし奈々夏の隣な」

「はい」

そういうと後ろから3番目の列の席で奈々姉の隣の席に着いた

「じゃあ1時間目の授業に遅れないように」

そういうと先生は教室を出て行った

「ねえねえ優くんはさ」料理で何が得意？」

いきなり前の席の女子が喋りかけてきた

次第に周りからも人が集まったきた

「えっと、私はハンバーグとか得意だよ？」

あと、目玉焼きとかも」

「へ」料理上手なんだね、あ、私涼子、よろしく」

「よろしく」

いきなりでびつくりしたな

でも料理は得意だからね」

「優」1時間目体育っしょ」

早く更衣室行こ」

「ああ」まってよ」てか、体操服、まだ貰って

ないんだけど」

「大丈夫」貸したるさかい」

「何言って、俺男だ」あ、」

しまった！！くそ

これはすごい罠だ

「はい、優これ付けるっしょ」

あと優の体操服なら私が持つてるっしょ

ちゃんと男もんだから安心して更衣室いつてくるっしょ」

「うん、ありがと…てっ、付けるのまた髪止めかい！

しかもオレンジか…まあいつか」

そうして更衣室に向かった

〓〓放課後〓〓

「あー疲れたー奈々姉ー帰ろうよー」

「私部活あるんっしょ…あんた男子バスケットでも

見学してみるっしょ？」

「うーん、そうしようかなーじゃあ私見てるから

帰るときに電話してねー」

ちなみにこの学校は携帯を持ってきても良いとゆう

校則があります！なんて良い学校だよ！

〓〓見学中〓〓

「うーん、なんか弱そうだなー…まあ

練習は満足できるし、部活はここにしよう」と

見学しながらそんな事を考えていた

自分はバスケ歴5年ぐらい

小学2年ごろから少しやり始めて

小3からミニバスのチームに入って練習していた

小6の時はミニバスでキャプテンをやっていた

フォワードになったかったが身長でガードしかできない

まあ、ポイントガードで実力を発揮した、シュートも打ってたし

そんな事を考えていた

プルルルルル プルルルルル

「はい？ 奈々姉？」

奈々姉から電話だった

「今から着替えて帰るから校門のところで待ってるっしょ」  
「うん、解った」

そして私は顧問の先生に礼を言ってから  
校門の方に行った

先生にどうだ？と聞かれたから

「練習内容は楽しそうです、  
考えときますね」と言っというた  
先生は笑っていたが小さい声で  
「強くは無いぞ」と言っていた

「優、お待たせっしょー」

奈々姉が制服に着替えてやって来た

「さあ帰ろう、家どっちだっけ？」

いきなりの天然に奈々子は少し  
笑いを我慢していた

「こっちこっち早く覚えてっしょー」  
そういつて奈々姉は手を引っ張ってく

帰り道に奈々姉が話してきた

「ねえねえ、部活、どうっしょ？入るっしょ？」

「まあ別に悪くないね…背が高い方だし  
強そうだったよ…先生によると弱いらしいけど」  
ありのままを話した

「そう、よかったあ、後、身長あるけど  
ポイントガードとかガードが弱いんっしょー」

奈々姉は偉そうに言った

「そうか、試合でも勝ったことないのか？」

「一樣5試合中2勝ぐらいみたいっしょ」

あんまり攻撃の形ができてないからっしょ」

「そっか、ありがとう…あれじゃあ県大は

難しいか…」

「そう？優が頑張れば行けるっしょ、たぶん！

身長じゃ問題ないしシュートのよく決まるのも

ちゃんというっしょ？ポイントガードが弱いだけ

だから優次第だともうっしょ」

奈々姉が自信満々に言って私の顔を見た

「じゃあ大丈夫そうだね！」

「そうだよ、大丈夫。

…優？なんか隠してないっしょ？」

急に奈々姉が聞いてきた

「バレたか…私、前いたところの県の選抜だった

バスケは自信あるよ…」

そう言い終わるともう家の前だった

ちなみに奈々姉はこの事を聞いて

何か思いついたのか

にやにやしていた…

なんだろう、奈々姉もすぐバスケ上手いのかな？

そんな事を考えつつ2人は家に入った

「ただいま…」

そういうと遊南が元気良く迎えてくれた

そんな遊南をなでながら

ふと、思いついた、そういえばこの家の家計は大丈夫なのだろうか…

まあ考えたところで何も分からないので

今度兄さんに聞く事にしようとな得して

自分の部屋（奈々姉と共同）に入った



今日から新しい学校！可愛い転校生！？（後書き）

はい、ここまで読んでいただきありがとうございます！！  
更新ペース遅いのにありがとうございます

今回はやけに長かったですけどどうでしたか  
続きが楽しみでしょうか？w w

では、次回をお楽しみに

なんかすごい人だね！！

家に帰った私は自分の部屋に入って鞆を置き、とりあえずリビングに行くことにした

「ただいま〜」

そう言っただけに入っただったが、そこには知らない女性が2人居た  
「おかえり優ちゃん、えっと、こちらは私の友達の高屋 真奈子<sup>たかや まなこ</sup>ちゃんで

こっちが相馬 佳乃ちゃん<sup>そうま かの</sup>、よろしくね」

そう言っただけ私の後ろに回って背中を押してきた

挨拶しといたらいいのかな？

「えっと、福井 優です、奈々姉の双子の弟です」  
そう挨拶をした

2人は不思議に思っただのか月菜姉に質問した

「ねえ月菜ちゃん？この子、男の子なの？」

そう言っただけだった

月菜姉はそれにこう答えたのだった

「一樣ね、でも男の娘だから！」

「一樣ってなんでしゅか！！私男の娘でもありません」

あ、大事なところで噛んじゃった

「月菜、優ちゃん可愛いの！！大好きになっちゃうの！」

「でしょ？優ちゃんは宝物よ！」

「えっ、か、可愛いって…う、嬉しくなんかないんだから！てか、  
優ちゃんって呼ばないでよ〜」

もう、月菜姉までこうなるとは思わなかった

「月菜ちゃん！優ちゃん欲しい！」

そう言って真奈子さんに抱きつかれた

真奈子さんは胸がちよつと大きい、ん、丁度顔の所に胸が来ていて  
苦しい

てか、何考えてるんだ！

そんな事を考えていたらリビングのドアが開いた

「優」… てっ！真奈子さん何してるんですか！」

「え？抱きついてるんだけど」

軽くそんな事を言っなよ…

ヘルプミー奈々姉！

「優が苦しそうっしょ、離してあげるっしょ、あと、優は私の物っ  
しょ！！」

ありがとう助けてくれて…

でも、なんか付いてきちゃったね…はう

なんかすごい人だね！！（後書き）

どうでしたか？

いや、短いのはわかってます…

次回をできるだけ早く更新するから許してえ

はい、見てくれてありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8958w/>

---

私の家族は！

2011年12月28日22時51分発行